

●制作

花鳥の賑わい
—野鳥と自然に出会う場—

渡邊 優 園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 章 俊華)

WATANABE Yu

1. 対象地と目的

千葉県の我孫子市と柏市に接する手賀沼は、その豊富な自然環境や野鳥の多様性により知られている。特に手賀沼沼辺には、鳥の博物館や山階鳥類研究所があり、年に一度ジャパンバードフェスティバルが開催されている。こうした恵まれた環境にも関わらず、野鳥の観察は主に愛好家によって行われ、野鳥に対する市民の興味は限られている。今回提案するデザインの目的は、手賀沼を訪れた人々が野鳥や自然に触れ、手賀沼の環境を理解して学び、関心を持つきっかけとなるようにすることである。具体的には、野鳥に対する観察者の関心度や野鳥の警戒による人との距離を考慮し、複数の観察スポットを設けることを考える。

2. 方法

ヒドリ橋周辺、手賀沼公園、若松地区植生帯、高野山新田地区植生帯を観察対象地として選定する。理由は二つあり、これらのエリアが葦の面積が大きい等の自然環境が豊かであること。また、水鳥の群れが見られ人の影響を受けにくい環境であることから選んだ。

3. 調査

最初に手賀沼の地形および水質の変遷について調査した。また、手賀沼での野鳥の記録を調査し、それを元に季節と環境に分けて表にした。(表 1)手賀沼は場所によって、東部分には田んぼや樹林が多く広がり、北西部分では住宅地が多く道路が沼に近いなどの環境の違いがあり、それによって生息する野鳥が異なることがわかる。(図 1)現地での調査は、手賀沼の沼辺周辺に加えて船上からの観察も行い、陸地からは見えない野鳥の生息する場所も確認できた。沼辺からは、遊歩道脇の樹林や葦の隙間から野鳥が見られ、船上からは、葦際や杭に留まる姿や、沼の上を横切って飛んでいく姿も見られた。

表 1 手賀沼での生息環境と季節ごとに見られる野鳥

No.	生息環境	通年	冬・春(12-5月)	夏・秋(6-11月)
1	手賀沼の湖面(水上)	コブハクチョウ、カルガモ、カイヅブリ、カワウ(7種)	トモエガモ、コガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、コハクチョウ...(12種)	—
2	手賀沼の湖面(上空)	トビ、オオタカ(2種)	ユリカモメ、セグロカモメ、クロハラアジサシ、ミサゴ(4種)	—
3	葦原(小島)	シジュウカラ、メジロ、スズメ、カワセミ...(6種)	シロハラ、アカハラ、ツグミ、ジョウビタキ、キセキレイ...(10種)	—
4	葦原(大型の島)	ゴイサギ、アオサギ...(5種)	クイナ(1種)	ヨシゴイ、アマサギ(2種)
5	水田・畑	キジ、ヒバリ...(5種)	タシギ、タヒバリ...(3種)	チュウサギ、ツバメ...(5種)
6	樹林(小島)	ヒヨドリ、セズ...(18種)	クグリ、ルリビタキ...(16種)	ホトトギス、ツツドリ...(11種)
7	樹林(大型の島)	アケボノ、チュウゲンボウ...(6種)	チュウヒ(1種)	ズミ、サシバ(2種)

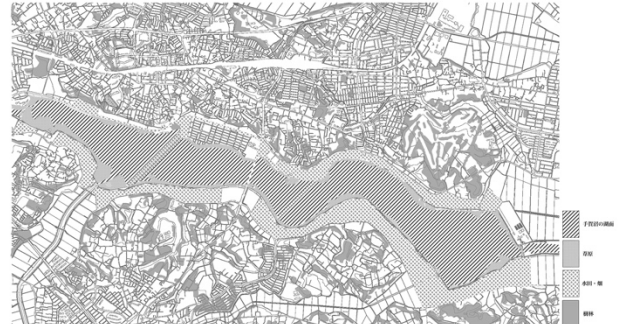


図 1 手賀沼の主な生息環境

水質について、手賀沼は 1969 年から 2000 年まで全国ワースト 1 位となっていた。汚濁が進んだ理由としては、干拓により以前の半分の面積になったことや流域人口増加による排水の流入などである。2000 年に北千葉導水事業による注水によって水質の改善が見え、27 年間のワースト 1 位から脱却した。

4. 考察

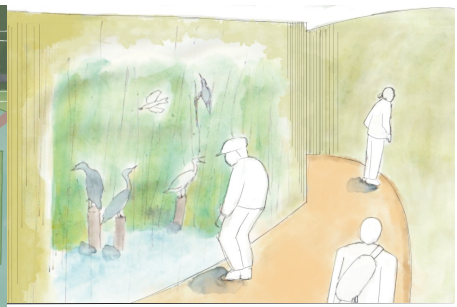
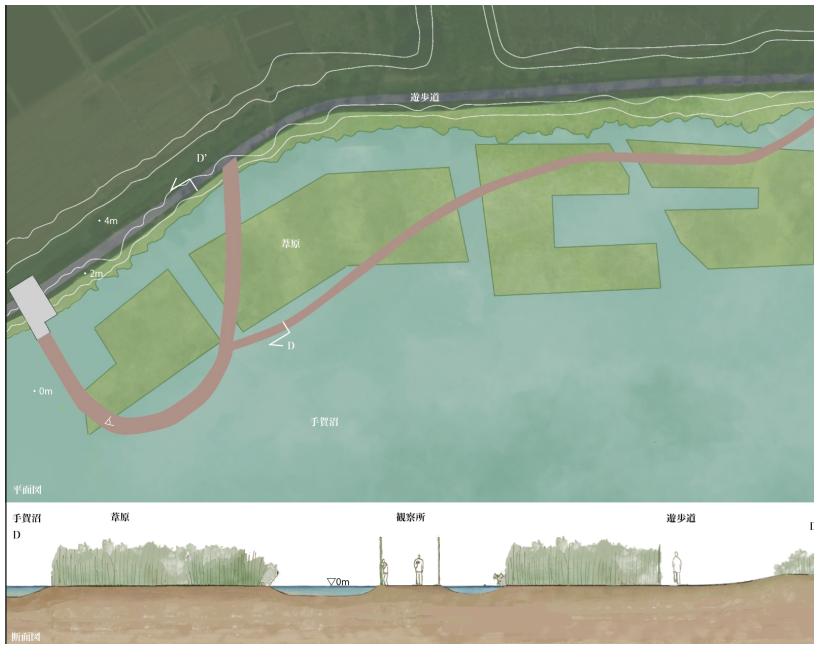
手賀沼周辺は都市のベッドタウンとして住宅が増えた場所であるが、樹林地も多くあり水田が広がり自然豊かな環境である。そのため、野鳥にとっても大変住みやすい場所であり、手賀沼では野鳥の種類や数を多く確認できる。特に水辺の環境は大型の鳥や群れで集まる水鳥を観察することができる。自然の中で野鳥が憩いその暮らしぶりを観察できる環境を整えることで、さらに人々が野鳥や手賀沼の環境への興味を持つことが考えられる。

5. 提案

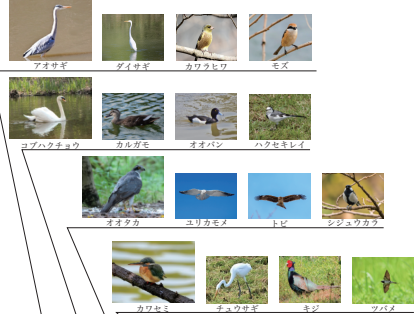
野鳥に対する観察者の関心度や、野鳥の生息環境の調査を考慮し、4 種の観察スポットを提案する。野鳥に関心を持つ度合いによって段階ごとに体験を変え、より深く野鳥に興味を持って観察できるようにした。訪れた人々が野鳥や自然に、関心を持つきっかけとなることを期待する。

参考文献

- 1) 我孫子野鳥を守る会(2022), 手賀沼の鳥Ⅳ—人と鳥との共存をめざして—
- 2) 我孫子野鳥を守る会(2022), 手賀沼の鳥 探鳥ガイドブック
- 3) 浅間 茂 林 紀男(2016), 手賀沼の生態学

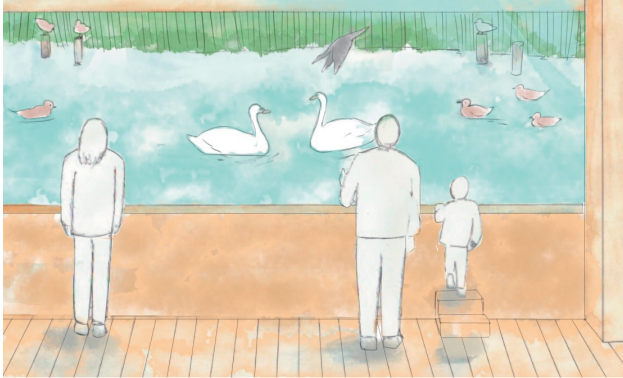


対象地で主に見られる野鳥



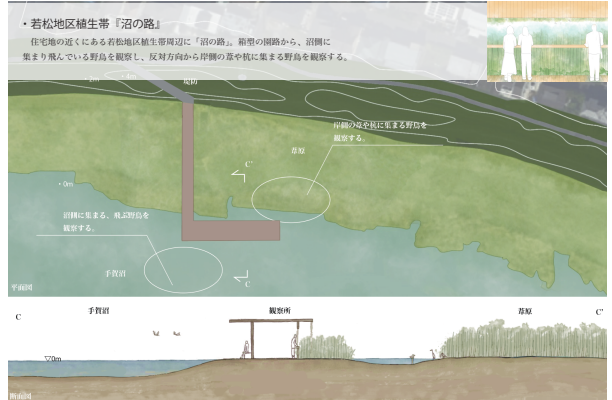
・高野山新田地区植生帯『緑の窓』

野鳥の観察者の関心度で段階的に分けていく。主に興味のない人と、少し興味はあるが見る運ぶほどではない人、愛好家で段階を設ける。目的としては、この野鳥が集まる場所に興味を持ってもらうことのため、この遊歩道歩く人たちの呼び込むことを目指す。人が集むよう水の池がある両側から人が来ることを想定し、そこから歩いて来た時に道を跨ぐような建物に目が向く。あまり興味のない人はその建物の野鳥カフェに訪れたりして、通り過ぎながらもこの場所を知る。訪れて興味を持つ人は、北側では、説明とともに田圃に集まる野鳥を見たのち、このカフェスペースを抜け、植生帯を一周するような遊歩道で水鳥を見て、最後に田圃側に留まる野鳥のさえずりを聞く体験となる。さらに興味の高い愛好家は、この狭い通路を渡ってより人の目から閉ざされた野鳥の世界を体験する。



・手賀沼公園『鳥の家』

図書館や公民館等市民が集まる場所である手賀沼公園に『鳥の家』。箱型の観察部分では近くの水域を観察し、上層の展望台からは、遠くの水域に集まる水鳥や水面を横切る野鳥を見る。公園を訪れた人がやや手賀沼を気懸けに見ることができる場所とする。



・若松地区植生帯『沼の路』

住宅地の近くにある若松地区植生帯周辺に『沼の路』。箱型の通路から、沼側に集まり飛んでいる野鳥を観察し、反対方向から岸側の葦や菰に集まる野鳥を観察する。



・ヒドリ橋周辺『葦の回廊』

自転車やランナーが通る堤防から沼に向かって下った葦原の中に、観察所までデッキをのぼす。この観察所は一人専用であり、対岸の葦原の間に集まる野鳥を観察することを目的とする。この場所の体制としては、まず葦の中の野鳥の鳴き声を聞きながら、葦の中の通路を進む。次に、葦の上空を飛ぶ鳥が強い上を横切り、最後に、観察所から対岸にいる野鳥を観察する。